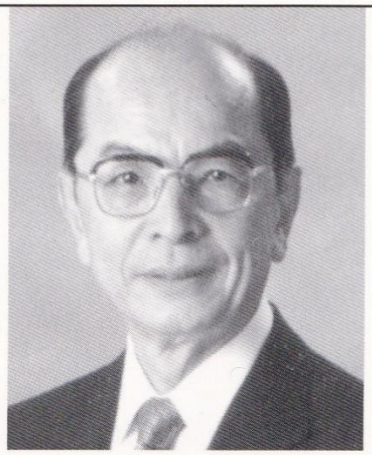

三菱庭球同好会
会長　岸　　曉

1955年に始まった全三井・全三菱テニス大会が2004年に50周年を迎え、その記念として本誌が発行されるにあたり、一言お祝いを申し上げます。

三井、三菱の庭球の歴史は古く、1922年の日本庭球協会設立以前に遡ります。

当時、三菱合資の熊谷一彌氏は全米ランキング3位（1919年）、三井物産の清水善造氏は全英テニス選手権で準優勝（1920年）の快挙を成し遂げました。翌1921年には両氏と柏尾誠一郎氏（三井物産）からなる日本代表チームが初参加のデビスカップでチャレンジラウンドに進出し、惜しくもチルデン擁する米国に敗退しましたが、その入場料分配金の2万ドルが翌年の日本庭球協会の設立資金となったそうであります。また、同協会の設立にご尽力され、初代会長となられたのが三井の朝吹常吉氏であります。

その後両グループから多くのデビスカップ選手を輩出しましたが、その代表格たる三井の加茂・宮城組、三菱の山岸・藤倉組をNo.1とし、男子・壮年からなる第1回全三井・全三菱テニス大会が、1955年に浜田山テニスコートで開催されました。以降、女子、シニア部門と層を広げ、50回大会までの通算成績は三菱の25勝23敗（中止2回）、ポイント数は560対561とがっぷり四つの大接戦となっております。

古今東西、幾多のライバルが存在する中で、三井と三菱は日本の企業文化を代表する二大グループであり、ビジネスの世界でも良きライバルでありますが、テニスにおいても正に実力伯仲で、半世紀の長きに亘りかかる良きライバル関係を構築してきたことは、他に例を見ないすばらしいことだと思います。

時は流れ、三井、三菱グループにおいても、そのグループ枠を超えた再編により名前の変った会社が少なからず見受けられますが、このような変化の時代にあって、テニスを通じて交流を深め、その伝統を継承してゆくことは、大変意義深いことだと思います。

『全三井・全三菱テニス大会50年の歩み』を辿りながら、諸先輩の方々のご尽力に感謝申し上げ、大会歴代幹事のご労苦に拝謝するとともに、次の半世紀も良きライバルとして本大会をますます盛り上げ、発展、飛躍されてゆかれんことを期待する次第であります。

（三菱東京UFJ銀行　相談役）